

## 緒言

奥田 太郎

私たちは常々、運なるものに翻弄され続けてこの世界で生きている。ここでこうして緒言を執筆している現時点まで私が生きてきたのも運が良かったからであろうし、今回こうして運をテーマに特集を組むことができ、強力な執筆者たちの協力を得られたのも運が良かったからであろう。少し大げさな言い方をすれば、運という自分の意のままにならないことが自らの人生に及ぼす影響、そして、それがもつ意味について問い続けてきたのが人類の歩みだとも言えるかもしれない。儚く失われる命や脆くも崩れ去る人生設計を前に、人びとは、一方で科学技術を進展させることで、自然を理解しその力を利用する知識と方法をもって立ち向かい、他方で社会制度を改革することで、運に左右されない理念と運に左右されても揺るがない仕組みをもって立ち向かってきた。それどころか、古来、運に翻弄される自らの姿そのものを様々な形で表現することを通じて、自分たちの人生に彩りを与え、抗い難く運に影響されるそのありように人間なるものの固有性をすらみだしてきたと言えよう。運とは事程左様に、人間として生きる事と不可分なものである。そうした運は、私たちの生き方に密接に関わる倫理と政治においていかなる意味をもつのか。それを様々な角度から解明するのが、本特集の目的である。

本特集は、英米圏を中心とする現代倫理学を専門とする古田徹也、ストア派を中心とする古代哲学を専門とする近藤智彦、分析的な手法による現代政治哲学を専門とする井上彰、戦争を主たるテーマとして応用倫理学を専門とする眞嶋俊造、以上4人の論者の論考によって構成されている。古田徹也は、現代倫理学における運をめぐる議論について、英米圏に焦点を絞ってその概略を述べつつ、そこで交わされる「道徳的運」という争点が、意のままにならないものを抱え込んで「よき生」を問う倫理学のありようを照射することを指摘する。倫理学は道徳哲学と実存哲学の間に跨る営みである、という古田が最終的に提示することになるテーゼは、続く近藤智彦の論考に流れる基本的なモチーフとも重なる。近藤は、アリストテレス、ストア派、キケロらの古代におけるテキストと、それを解釈する現代の倫理学者たちのテキストを往復しながら、運をめぐる論争の行き着く先に、理性的自律的存在か傷つきやすい存在かといった人間観の対立、および、それに伴う理想としての平等や公平をめぐる思想的対立を見出すことになる。こうして運と平等をめぐる議論は古代から現代に至るまで引き続き展開されてきたわけ

だが、その最先端を示すのが、井上彰による論考である。井上は、現代政治哲学における運の平等論と社会関係に基づく平等論との間の争点に含まれる議論構造を分析的に掘り下げることで、運と平等に関する徹底した考察のその先に、いかなる原理を正義の核心に据えるか、それをいかに正当化しようかといった正義論の根本問題が、「正義のコンテクスト」をめぐる問題として剔抉されることを明らかにする。そして最後に、より具体的に、運なるものに大きく影響される事例として戦争と運の問題を論じるのが眞嶋俊造の論考である。興味深いことに、眞嶋はその論考を通じて、戦争における運の問題を解く手がかりを軍事専門職倫理教育のなかに見出すことになり、運と教育という新たな争点を浮かび上がらせる。これら4つの論考はすべて、その底流で複雑に連関しており、すべてを通読することで、倫理と政治における運の問題の所在が明らかになるであろう。

最後に、本特集が成立した経緯に言及しておきたい。本特集は、2016年10月1日（土）に早稲田大学にて開催された日本倫理学会第67回大会における主題別討議「倫理学における運の役割」での討議をもとに構成されている。学会当日に登壇したのは、本特集執筆者のうち、古田徹也、近藤智彦、井上彰の3名であった。三者の研究報告はすべて力のこもった魅力的なものであり、パネルディスカッションでの討議も実に充実したものとなったが、運の悪いことに、これらの成果が論文として学会誌を賑わすことは制度上ありえないことが明らかであった（ただし、報告要旨および報告概要は、それぞれ学会予稿集および学会誌『倫理学年報』に掲載されている）。この学会企画の実施責任者として、運の問題を哲学的に論ずるために現時点で考えられる最強の3人を選び出した自負もあり、また、日本の倫理学や哲学においてまとまった形で運の問題を正面から取り上げた学術雑誌をほとんど見かけないという事実認識もあって、何とかどこかでこの成果を論文として残せないかと考えあぐねていた。運良く、社会倫理研究所の学術誌『社会と倫理』の編集委員であった私は、特集の企画を編集会議に提案し、ここにその企画が実現したというわけである。

本特集を立てるに当たり、上記の3名に加えて、日本における戦争倫理学の代表的論者である眞嶋俊造に、倫理と政治の間を架橋する観点から運を論じてもらうことにした。（裏話を付記するなら、眞嶋は、上記主題別討議の開催時、別の会場にて別テーマの主題別討議で登壇していたため、本特集を支えた原動力となる議論を共有していない。そのようななか、執筆を快諾していただき、示唆に富む論考を寄稿して下さったことに感謝したい。）当初の企画では、4本の論考を串刺しにするようなコメント論考をぶつけて誌上シンポジウムを成立させようと考えていたのだが、執筆候補者との調整がうまくつかず、結果的に現在の形になった次第である。この点については運が悪かったとしか言いようがないが、本特集を起点に、運をめぐる哲学的・倫理的・政治哲学的討議が日本において今後盛り上がる素地を準備できたことをもってよしとしたい。そうした盛り上がりを実際に起こったとすれば、その時点において、私たちの営みは運が良かったことになるのかもしれない。